

ロンドンのアラン・フルニエ

鈴木 正 昭

〈目 次〉 序 章

初めての外国体験

労働とその対価

異文化との遭遇

散策、美術館と公園と

読書と文学活動

忘れ得ぬ人々

序 章

アラン・フルニエ（本名はアンリ・アルバン・フルニエ）は1905年の夏期休暇をロンドンの A. サンダーソン氏の経営する壁紙製造会社で働いた。期間はおおよそ二ヶ月半だった。1905年という年は日本の元号でいえば明治38年で、わが国は前年からの日露戦争に辛くも勝利を納め、明治時代最大の国難を乗り越えて、前世紀の後半から帝国主義時代に入っていた先進国に続いて帝国主義へと変貌していくことになる。そしていまだひ弱だったわが国にとって困難な戦の最大の頼みの綱になったのがアラン・フルニエが赴いたイギリスだった。日本は1902年の1月に英国との間に日英同盟を締結していたからである。そしてその2年後、1904年の2月についに日露戦争が始まった。この戦争は翌5年5月の日本海の手海戦をもって実質的に終わり、9月にはポーツマス条約が締結された。アンリのイギリス滞在中の8月には日英同盟が更新された。

イギリスはつい数年前に1837年から1901年までに実に六十年以上の長きにわたって君臨したヴィクトリア女王が亡くなったばかりで、アンリの滞在期間はエドワード七世の治世（在位1901—1910）の中期にあたっていた。ヴィクトリア女王の時代に英国は誰もが知るようにその絶頂期を迎えたのだが、第一次世界大戦後はアメリカ合衆国にその指導的地位を譲り渡すことになった。もっとも既にヴィクトリア時代の後期には、英国はそれまで無敵を誇ってきた世界市場において重大な脅威を受けるようになっていた。すなわちアメリカ合衆国とドイツの台頭である。アメリカは南北戦争後、工業がめざましく発展した。事情はドイツもまた同様だった。英国が自由貿易体制を維持したのにたいし、これら両国は高関税政策によって自国の産業を保護する政策をとって英国を苦しめた。しかしながら、アンリの訪れた時代はまだヴィクトリア時代の余韻が残っていたし、大英帝国はその栄光の輝きを放っていたのである。

一方フランスは1894年に露仏協商を結んで、長年の孤立を脱し、折から世界的な趨勢となっていた帝国主義への勢いに弾みがつくことになった。そしてアンリが英国に赴く前年の1904年にはイギリスとの間に英仏協商が結ばれた。こ

これはエジプトにおける英国の優先権を認める代わり、モロッコにおけるフランスの優先権を認めるという条約であった。だが翌1905年ドイツがフランスのモロッコでの優先権に異議を唱え独仏関係は大いに緊張した。その後仏露、英仏の二つの協商関係は、1907年には英仏露の三国協商へと発展した。また同年には日仏の協商関係が、さらには昨日までの敵国だったロシアとの間にも日露の協商関係が締結され、ドイツ包囲網が形成された。そしてこれらの複雑な国際関係の行き着く先が第一次世界大戦だった。

フランス国内では前世紀の終わりには国内世論をまっぴらに割ったドレフュス事件があったほか、各地で労働争議や炭坑労働者のゼネストが起こり、決して平穏無事な時代ではなかったはずなのであるが、それでも世界大戦以降の時代に比べれば「古き良き時代」だった。フランスではこの時代、というのは第三共和政の時代には、ということであるが、一方で帝国主義的傾向を深めると同時に、他方では社会主義政党や、労働運動もその勢力を拡大した。もっともフランスのこの時期の労働運動はサンディカリズムが中心で、政党との共闘や従属を拒絶して運動の自律性や純粋性を重んじたものであったことは広く知られている。

今日この時代は普通ベル・エポックと呼ばれているのは周知の通りである。これが正確にいつからいつまでをさすのかについて定説があるわけではないが、普通は普仏戦争の終わった1871年から第一次世界大戦の始まった1914年までをさす場合が多いようである。すなわちベル・エポックの時代はいわゆる「帝国主義」の時代とぴったり重なりあっているのである。ベル・エポックという言葉自体はフランス語であるが、この言葉が呼び起こす、失われて二度と戻らぬ、平和な時代というイメージはヨーロッパ各国の人々に共有された感慨と考えられる。大戦後のヨーロッパは政治的、経済的な主導権をアメリカに譲り、「西欧の没落」がささやかれるなど時代の変遷を意識せざるを得なかったからである。

ベル・エポックの時代にパリはオスマンによる大改造によって面目を一新し、ほぼ今日のパリ市が完成をみた。またこの時期は万国博の時代と言っても過言ではないほどたびたび博覧会が開かれて、世界各地の物産や芸術が紹介された。

ジャポニズムのきっかけとなった1867年、1878年のパリ万国博のほか、パリではさらに1889年と1900年にも万国博が開催された。エッフェル塔は89年の万国博のために建設されたものである。さらにはパリ市の地下鉄も1900年の万国博に間に合わせて建設されたものであった。

初めての外国体験

ところでアラン・フルニエがサンダース氏の壁紙製造会社で働くことになったのは、リセ・ヴォルテール時代の友人だったジャン・ベルナルの兄がこの会社のフランスでの代理店だった関係からだった。そしてアンリ自身、当時彼が志望していたエコル・ノルマル（高等師範学校）卒業後の職業として英語教師を想定していたからである。そして生きた英語を身につけるには学校の授業のみでは不十分であることを彼はよく理解していたからである。8日7日付けの妹イザベル宛の書簡で彼は「毎日少しずつ英語を覚えているのがここでの僕の唯一の支えであることを忘れないようにお母さんにわからせてあげてください。⁽¹⁾」と書き送っている。

出発は7月2日、日曜日である。サン・ラザール駅からディエップまでは汽車の旅だった。車中では推薦状を読み返したり、当日愛読していたディッケンズ目で英国社会を観察するのだという抱負をいだいたりした。彼のディッケンズ熱は英国到着後も衰えず、英語の勉強を兼ねて読み続けられることになるだろう。また早速同じ車両に乗り合わせた英国人農夫を観察し、彼らについての物語を頭の中に作りあげようと試みた。ディエップ着は深夜零時半のことだった。

ディエップから英国へは船旅である。彼の乗ったのは英国船で、ニューヘイヴン行きだった。ここから彼にとって外国が始まった。甲板上也また列車同様、彼に多くの人間の演じるドラマを提供してくれた。英国へ出稼ぎに行くイタリア人や中国人、彼らのふりまく陽気な惨めさや、グロテスクな惨めさ。荷物に腰掛けるものもあれば、抱き合ったまま眠っている夫婦者もあった。船の旅はジャック・リヴィエール宛の書簡では6時間⁽²⁾、家族宛の書簡では5時間⁽³⁾となつて

いるが、家族宛の書簡では朝の6時にニューヘイヴンに着いたという記述がみられるので、この時刻が正確であれば5時間が正しいものと思われる。深夜の船旅は彼にホイッスラーの絵を思い起こさせた。

ジェームス・マックニール・ホイッスラー（1834—1903）はアメリカ人でパリに学んだ画家である。彼は日本の浮世絵の美しさをいち早く発見し、印象派の先駆けとなったことで知られる。後年英国に渡って制作を続けた。彼は熱狂的な日本愛好家であり、彼によって英国に日本趣味が持ち込まれたのであった。また同時に、彼によって英国美術にヴィクトリア朝を支配した堅苦しいピューリタンのモラルから解き放たれた、自由な芸術の概念が持ち込まれたのである。

夜明け前に水平線上を進む駆逐艦を見て、船乗りに憧れていた頃の自分を思い出した。彼はパリのリセ・ヴォルテールからプレストの船員養成学校に転校したこともあった。またリヴィエール宛の7月9日付けの書簡には6月1日にパリのグランパレで出会ったイヴォンヌ・キエヴルクールに関する記述が見いだされる⁽⁴⁾。また彼女の父親とツーロンについての言及も見いだされるが、これは彼女の父が海軍軍人であり、彼女も父親の任地であるツーロン（軍港）に居住していたからである。

ニューヘイヴンからロンドンまでは汽車の旅であるが、彼は沿線に広がる田園風景の美しさ、とりわけ野原の緑色と巨木に心を奪われた。ロンドンの第一印象は大きな町であると感じたことは当然として、みずみずしい、緑あふれる、清潔な町であることだった。これは我々がロンドンに対していただくイメージとは大きく異なっているのは興味深い。英国での生活にたいする期待によって結晶化作用が起っていたものと考えられる。

労働とその対価

アンリのロンドンでの住まいは、これからの勤務先の役員をしていたナイチンゲール氏という人物の自宅だった。実はアンリは最初は別に住まいを探す予定でいたのであるが、氏のほうから自宅に滞在するよう好意的に申し出てくれたのである。氏の話によれば、当時のロンドンでは、たとえ粗末なホテルに滞

在したとしても、賄い付きの場合には週15シリングは必要だった。ナイチンゲール氏がアンリに提供してくれたのは狭いがきれいな部屋で、それに食事込みで週12シリングという破格の好条件だった。ただしそれには一つだけ交換条件があった。毎日1時間氏にフランス語のレッスンをつけることである。氏の住まいはロンドン郊外のチスウィックにあった。ここは高級住宅で、氏の住まいも、ロンドンの郊外に当時無数にあった「微妙な色合いを帯びた石で作られ、ステンドグラスをもち、窓にはレースのカーテンがあつて、いたるところからピアノやフルートの調べが聞こえてくる」⁽⁷⁾ような住まいの一つだった。

ところで英国滞在中のアンリは家族およびジャック・リヴィエールに多くの書簡を書き送っている。およそ70日の間に、17通が家族宛に、そして9通がリヴィエールに書き送られた。これらの書簡はハガキ一枚の短いものから、朝から夜までかけて書かれた便箋数十枚におよぶ長いものまでさまざまであるが、今日我々が彼の英国滞在について比較的詳細に知ることができるのも、全くこれらの書簡のおかげである。

これらの手紙、とりわけ家族宛のものにはしばしば金銭に関する記述が見いだされ、当時の英国の物価や、アンリのロンドンでの暮らしについて知る絶好の資料を提供してくれる。具体的な金額に言及する前に、当時の英国の貨幣制度を振り返ってみることにしよう。この制度は、1971年に大きな変更が加えられて10進法が取り入れられるまで、1ポンドは20シリングで、1シリングは12ペンス（単数はペニー）という複雑な制度が採用されていた。

ここで書簡のここかしこに見いだされる数字を少し見てみよう。アンリの週給は最初8シリングの約束であったが、実際には10シリングが支給されたことがリヴィエール宛の書簡からわかる。⁽⁸⁾ ナイチンゲール氏への支払いが週12シリングであるから、会社から支給される給与だけでは生活は成り立たないことになる。従って金銭についての家族宛の書簡はいきおい無心の手紙になりがちなのはやむを得ないことだった。彼は物価の高さを嘆き、自分が無駄づかいをしているわけではないことを釈明して、金を送るよう何度も家族に懇願したのだった。当時の物価について以下にいくつかの例をあげてみよう。

麦わら帽子……………3シリング6ペンス

| | | |
|---------|----|----------------------------|
| 靴下（1足） | …… | 1 シリング |
| ネクタイ | …… | 1 シリング |
| 便箋 | …… | 1 シリング ⁽⁹⁾ |
| たばこ（1箱） | …… | 6 ペンス |
| レモネード | …… | 6 ペンス |
| 市電（片道） | …… | 1 ペニー |
| 地下鉄（片道） | …… | 2 ペンス |
| ハガキ（1枚） | …… | 1 ペニー ⁰⁰ |
| 靴修理 | …… | 3 シリング 9 ペンス ⁰⁰ |

当時の英国の物価と今日の日本のそれを正確に比較することは困難であるが、仮にハガキや電車の片道運賃である1ペニーを100円とすると、1シリングは1,200円になり、彼の最初に受け取った週給10シリングは12,000円になる。いかにアルバイト社員としての彼の給与が低かったにせよ、靴下、ネクタイ、便箋を購入するのにそれぞれ週給の10分の1を要したのでは、アンリならずともロンドンの物価高を呪いたくもなろう。またたばこやレモネードの価格も今日に比して高すぎるように思われる。ついでながら当時のフランス・フランと英国のポンドとの交換比率は1シリング＝1.25フラン程度だった。そして英仏間の運賃は35フランだったので28シリング、即ち1ポンド8シリングだった。

アンリが英国に滞在した時期よりも少し前の時代、即ち19世紀後半には社会の中間層と呼ばれる人々の年収が100ポンドから1000ポンドの間で、下層階級のそれは年50ポンドと言われていた。事実、リヴァプールの船主だったブースが実施した社会調査「ロンドンの人びとの生活と労働」（1889-1903）によれば、ロンドンの家族の約三分の一は週におよそ1ポンドかそれ以下の貧困状態におかれていたようである。⁽¹²⁾ またラウントリがヨークでおこなった調査でもほぼ同様の結果が得られた。⁽¹³⁾ 現代ほど物価上昇度が早くなかった時代とはいえ、アンリが滞在した頃は貨幣価値も多少は下落したことを考慮すると、アンリの受け取った給与は低すぎたようである。週給10シリングということは月収2ポンドということであるから、年収は僅か24ポンドということになり、一時代前の下層階級の年収の半分ということになる。気楽な一人身とはいえ、初めて来た異国

での暮らしであるから何かと不時の出費も必要だったろうことを考えると、ア
ンリの無心にも理があるように思われる。

彼の任された仕事の内容は主として手紙（商業通信文）の分類や、フランス語
の手紙を英語に、また英語の手紙をフランス語に翻訳することだった。ただし、
一般の書簡ではなく、商業文という特殊なものだったので最初は不安を覚えた
が、いくつかの専門語を教えてもらうとやがてさほどの困難をおぼえなくなっ
た。

勤務時間は午前8時から12時半まで、1時間の昼休みをはさみ午後1時半か
ら6時までだった。⁽¹⁴⁾1日10時間労働で今日よりも2時間多いだけでなく、当時
はまだ週休2日制以前で、土曜日でも午前中は出勤したからかなり苛酷な労働条
件であった。英国の第一印象については、あまり異国に來たという実感をいだ
くことはなく、むしろいつかどこかで見たことのある土地に戻ってきたような
やすらぎを覚えた。英語にたいする興味や関心、英語教師になるであろうとい
う予感、当時好んで読んでいたディッケンズの小説を通してなじんでいた英国
社会にたいする親しみ等がその原因と考えられる。

これは彼の英語に対する自信もあずかって力があつた。もっとも英国につい
た直後、彼は意外によく通じる自分の英語に気をよくしていたが、さすがに職
場に入ってしばらくすると必ずしも十分でないことを自覚せざるをえなかつ
た。周囲の人々は彼の英語を賞賛してくれたが、リヴィエール宛⁽¹⁵⁾の書簡では「周
囲の人々の喋ることは四分の一、直接面と向かって話す場合は半分」と実状を
打ち明けている。

異文化との遭遇

英国に到着した当日彼を自分の家に連れて行って食事をさせ、さらにホテル
住まいは高くつくからと言って好意的に自宅を提供してくれたナイチンゲール
氏は一介の労働者から身をおこし、現在は実質的に会社の経営権を握っている
人物だった。彼の住まいはロンドン郊外のチスウィック、ブランデンバーグ5
番地だった。先に見たごとく、ロンドン郊外に多くある美しい住宅の一つであ

る。これらの美しい郊外のお屋敷街はよほどアンリの気にいったものとみえ随所に言及が見いだされる。

氏の家族は夫人と二人の女の子の四人暮らしだった。氏は極めて背が高く、若々しく見え、ブロードだった。誰に対してもやさしく、家族に対しては子供のように振る舞った。このナイチンゲール氏にアンリは原則として毎日午後7時から8時までフランス語のレッスンをした。夏のこととて二人は庭の芝生のロッキングチェアで授業をしたのだった。

ナイチンゲール氏宅でも会社でも周囲には女性が多かった。彼の目に映った英国女性はフランス女性よりもはるかに解放的に見えた。着ているものもフランス女性がどちらかといえば身体を締め付ける、窮屈な服を着ている場合が多かったのに比して、ゆったりとした服を着ている女性が多いように見受けられた。そしてアンリを驚かせたのは英国女性の多くがコルセットを着用していないということだった。それからもう一つ彼を驚かせたのは自転車に乗る女性が多いという事実⁽¹⁸⁾だった。

自転車の元祖らしきものは19世紀初頭に出現していたが、今日見られるような、前輪と後輪が同じ大きさをもつ自転車が出現したのはずっと後のことである。1885年にジョン・ケンプ・スターレイがローヴァーと名付けた新型の自転車を発表したのだがこれが今日我々の乗っている自転車の直接の先祖であると言われている。それ以前の前輪と後輪の大きさの極端に異なる自転車には危険が付きまとったが、ローヴァーにはその恐れがなく、俗に言う「女子供」でも乗ることができるようになったのである。当時の女性達にとっては自転車に乗ることも一つの自己主張の手段であったに違いない。

英国でアンリを一番当惑させたのは言葉の問題でもなければ、文化の相違でもなく、最も卑近な食生活の相違だった。もっとも食生活も文化の一分野には違いない。アンリによればナイチンゲール家の食事の構成は次のようになっていた。

食事の回数は一日四回。朝の8時が朝食。卵か魚がだされ、飲物はミルクあるいは紅茶。それにバターをぬったパンとジャムが提供された。これを仕事の関係で彼は毎朝7時半にとった。昼食が最も豪華で、パンの代わりに、すぐり

のはいったお菓子とジャム、それに魚料理などがでた。お菓子の食べ方がまた奇妙だった。右手にスプーンを持ち、左手に小さなフォークを持って食べるのだった。午後の6時はティーの時間である。出されるものは鰯とお菓子である。もちろん当然紅茶がだされたが、それは必ずいわれるミルクティーだった。そして一日を締めくくるのが午後9時半頃の夕食である。サラダにドレッシングをかけずに塩をふって食べるというのも大きな驚きだった。パンもブリオッシュに似たまずいパンが一つ与えられるだけであったが、じゃがいも料理がだされる場合はそれすら与えられなかった。

夕食の飲物はワインと思い込んでいた彼には、ナイチンゲール家の人々が大きなグラスにはいったシロップかビールを飲むのもショックを与えずはおかなかった。パンを好きなだけ食べられないことに音をあげたアンリは7月13日(日)付けの家族宛書簡で、辞書を送るとき一緒にパンを送るよう依頼している。ただしナイチンゲール家の人に露見すると困るので、それとわからないように荷造りするようつけくわえた。また沢山あっても固くなってしまうので二つ、三つでいいとも書き加えた⁽¹⁷⁾。さらにリヴィエール宛の書簡(7月9日付け)でも、「もしフランスパンを売っている店を見つけたら、何が起こるかわからない⁽¹⁸⁾」とまで言っている。事実7月16日付けの家族宛書簡では、散歩の途中パン屋でフランスのプチパンを買って、あまり他人の目のあるところでは食事をしないイギリス人達の仰天をものともせずむさぼり食ったことを報告している⁽¹⁹⁾。

散策、美術館と公園と

滞在期間のとりわけ初期にはアンリは熱心に美術館巡りをしている。彼がこうしたことが可能だったのは主として土曜の午後と日曜日に限定された。7月9日付けのリヴィエール宛書簡にはハノーヴァー美術館を訪れ失望したことが述べられている⁽²⁰⁾。同16日付けの家族宛の書簡には15日(土曜)の午後ナショナル・ギャラリーおよびナショナル・ポートレート・ギャラリーに行ったことが報告されている⁽²¹⁾。この二つの美術館については格別の感想は述べられていない。た

だ充実した休暇を過ごしたことについての満足感だけが記されている。ナショナル・ギャラリーについて23日のリヴィエール宛書簡に様子が詳しく記された。⁽²⁾ここでポートレート・ギャラリーには関心が持てない旨を言明している。ナショナル・ギャラリーは主として外国およびルネッサンス美術に優れていた。彼の印象に残ったのは以下のような作者と作品だった。

レンブラント……………肖像画（自画像、老婦）

「サビヌの女性の誘拐」大胆、自然主義的、豪華
絢爛

「水浴する女」地味で極めて自然主義的傾向が強い

テニエ……………「会話」、「ボール遊び」

ベルリーニ……………「総督レオナルド」

ヴァン・ダイク……………「チャールズ一世」

グルーズ……………「羊を連れた少女」、「リングを持つ少女」

ジョン・コンスタブル……………「谷間の農場」

ターナー……………「汽車」、「マブ女王の洞窟」、「ピットワース公園」

「ヴェニスへの接近」、「ポリュフェムスを嘲る

ユリシーズ」、「チャイルド・ハロルドの遍歴」

これらの画家のうち彼の興味を強く引いたのはコンスタブルとターナーであった。この美術館自体が特にターナーには力をいれ、ターナーの作品のための部屋が特別に割り当てられているほどの充実ぶりだった。

8月13日付けのリヴィエール宛の書簡ではテート・ギャラリー訪問の様子が語られている。なおこの他にもケンジントン美術館やワラス・コレクションにも行ったようであるが、それについては言及がない。テート・ギャラリーではバーン・ジョーンズ、ロゼッティ、ワッツ、レスリー、ウオーカー、オーチャードソン、ミレー、メイソン、グラハムといった名前が挙げられている。

テート・ギャラリーに関しては8月27日付けの書簡のほぼ全文が費やされた。ガリマール社の往復書簡ではほぼ8ページであるから、かなり長文の書簡である。この美術館はウエストミンスター寺院からほど近くにあり、テムズ河からも

至近距離にある工場地帯で煙突が林立して、どちらかといえばあまり美術館にふさわしい立地とはいえなかった。小規模で外見的にはあまり見栄えがしなかった。だが内部は英国の他の美術館同様、きれいに掃除がゆきとどき、ぴかぴかに磨きたてられていた。そして所々に椅子やベンチが配置され、ゆっくりと絵を鑑賞できるよう工夫されていた。そしてフランスの美術館と異なり、目の高さで一行だけ絵が配置されていて疲れないような配慮がなされていることにアンリは感心している。彫刻の部屋では作品が少なく、少し離れた場所にあるワッツの作品を納めた部屋は人の気配がなさすぎて恐いぐらいだった。だがそれだけに、アンリは二度の訪問でこの美術館の全容をほぼ把握することができたのだった。

テート・ギャラリーの展示された作品中彼の関心を引いたのは以下の作者ならびに作品だった。

- ウィルキー……………「目隠し鬼ごっこ」
- レスリー……………「サンチョ・パンサ」シリーズ
- ウェブスター……………「学校」シリーズ
- D. ロバーツ ……………「ブルゴス大聖堂内陣」
- マクリーズ……………「ハムレットにおける上演の場面」
- W. ウォーカー ……………「避難港」
- リッチモンド、ダイス…「聖ヨハネとマリア」
- H. ウォリス ……………「チャタートンの死」
- ミレー……………「オフェーリア」
- ウォーターハウス……………「聖ユーラリア」, 「シャロットの貴夫人」
- D.G. ロゼッティ ……………「受胎告知」, 「ベアタ・ベアトリクス」
- 「ウィリアム・モリス氏夫人」
- B. ジョーンズ ……………「コペティアン王と乞食女」
- F.M. ブラウン ……………「使徒達の足を洗うキリスト」

これらの画家の多くはいわゆるラファエル前派という呼び名でくられる画家達のグループに所属する。19世紀の半ば頃の英国の画壇ではラファエルが偶像視されていた。当時の英国画壇を支配していたのは「ロイヤル・アカデミー」

であり、その初代会長ジョシュア・レイノルズの芸術論が圧倒的な影響力を持っていた。彼はラファエルおよび彼の影響を受けた画家たちを尊重した。ラファエル前派の運動はこうした傾向に対して、1848年にジョン・イヴェレット・ミレー、ホルマン・ハント、ダンテ・ガブリエル・ロゼッティの三名を中心に起こされた芸術運動だった。彼らの運動は最初は支持されなかったが、ラスキンらの弁護により徐々に支持を集めるようになった。彼らはラファエル以前の初期ルネッサンスの素朴で力強い様式を取り戻すことを主張した。自然から出発して、日常的なものの中に美を見いだそうという運動であったけれども、彼らの運動が果たして彼らの擁護したジオットやフラアンジェリコたちと同じ方向を目指していたかは極めて疑わしかった。

なぜならば、彼らは自然に学ぶことをスローガンにしていたにもかかわらず、実際には文学、歴史、神話といった分野にその題材を仰いだものはなはだ多かったからである。「ラファエル前派の写実²⁴は細部における写実であり、至近距離における細密描写であり、触覚的描写なのである。歴史、神話的主題によるものも、人間の顔は現代のモデルによっている。さらにその衣装、アクセサリーの細密描写、この近距離的な、室内的なすべての部分を同じに表現するやり方が、空気遠近法を否定し、タピスリ的な工芸性を帯びさせる。」と海野弘氏は述べている。アンリも彼らラファエル前派、とりわけその模倣者たちが象徴と小手先の技巧に頼りすぎる点を指摘している。

ラファエル前派の画家たちの間にも「自然から」という点については対立があった。とりわけミレーとロゼッティの意見の相違は大きかった。ミレーが自然主義や写実主義を主張したのに対し、幻想性、象徴性に傾いたのがロゼッティだった。ロゼッティの思想はバーン・ジョーンズを経てウィリアム・モリスへと引き継がれていく。アンリのラファエル前派の画家たちに対する評価も、ロゼッティやモリスへのそれがもっとも高かった。とりわけロゼッティの「ベアタ・ベアトリクス」はその表情が彼の永遠の女性の面影に生き写しであったため偏愛してやまなかった作品である。

ラファエル前派の芸術運動は会員が次々に離脱したが、このロゼッティの「触覚的写実（室内性、平面性、工芸性）による神話的幻影、象徴性²⁵」をアール・ヌ

ーボーに残したのだった。他の画家たちの多くは上昇するブルジョワ階級の支持を受け易い題材(中世の騎士道の世界, 騎士道のキリスト教への帰依と, ブルジョワ階級のピューリタン道徳の同一視, 古代ギリシャ・ローマの日常風景)と技法により支持を受け世間的には大きな成功をおさめたが, 当初持っていた反逆性を失い, 保守化した。

美術史的に言えば, ラファエル前派の後を継ぐのがアール・ヌーボーの運動である。このアール・ヌーボーというのはハンプルク出身の美術商が1895年12月にパリに開いた店の名義に由来する。彼はジークフリート・ピングといい, 明治初期の日本を何度も訪れては日本の伝統的美術品を買い付けてヨーロッパで販売活動に携わっていた。彼は従来の芸術に飽き足りない思いをいдаく芸術家たちを組織し, そのリーダー格となった。この運動はパリ万国博の開催された1900年にそのピークに達した。日常生活を重視するこの運動の傾向はアール・ヌーボーとともに始まったわけではなく, それ自体ラファエル前派の芸術運動の遺産だった。とりわけ細密な自然描写やウィリアム・モリスを中心とする「アーツ・アンド・クラフツ運動」がそうである。

この運動の主眼は産業革命以降一般的になっていった工場での規格品の大量生産を否定して, 職人による手作りの製品を取り戻すことにあった。建築, 家具, 食器, ポスターなど, この運動は身の回りにあるほとんど全てのものをその対象とした。

今日残るアール・ヌーボー様式の建築物として有名なのはブリュッセルにあるヴィクトール・オルタ設計になる「ソルヴェイ邸」である。またエクトール・ギマール設計によるパリの地下鉄アベス駅の装飾性に富んだ入り口もよく知られている。だがアール・ヌーボー様式の建築物として最も有名なものといえば, バルセロナにあるアントニオ・ガウディ作によるサグラダ・ファミリア教会であることに異論を唱えるものはないであろう。

建築以外の分野では今日でもしばしば見かけることのあるポスターのたぐいが思い浮かぶ。これらのポスターは当然のことであるが, 何らかの商業活動の宣伝に役買うために創作される場合が多かった。有名な作品としてはロートレックがキャバレー「アンバサドル」のために描いた作品があげられる。ま

たエミール・ガレのガラス細工を思い出す人も多いことであろう。もっともガレもまた後年は多くの注文に応じるため工房で大量生産するようになり、手作りのよさを失った。そして第一次世界大戦の前後から、後期のアール・ヌーボーの陥った装飾過多に対する批判が強くなり、より機能性が求められるようになっていった。そしてこのうねりは大戦後のアール・デコの運動へと引き継がれていくことになる。アンリのわずか28年の生涯(1886年-1914年)の大半は、とりわけ人間形成期はほぼアール・ヌーボーの時代と重なり合っている。

その他アンリがテート・ギャラリーで注意を引かれたのはG.F.ワッツの作品を多く展示した部屋である。他にも多くの作品を見たが彼が強い関心をよせたのは、少なくともこの美術館に関する限りアール・ヌーボーの画家たちや、それらを予告するターナーらであった。

美術館巡りのほかにも彼はよく出歩いた。平日は夜近所を散歩するだけで満足せざるを得なかったが、土曜、日曜には一人あるいはナイチンゲール氏ほかと乗り物を利用して近郊を散策している。7月16日付けの家族宛書簡では「こちらに来てからというもの、出かけたり、外の空気を吸いたいという、あらがいがたい、肉体的な欲求を持つようになりました」と記している⁽²⁵⁾。

この16日付けの書簡ではナイチンゲール氏と汽車に乗ってリッチモンドを訪れたことが報告されている⁽²⁷⁾。そしてロンドン近郊の田園地帯の美しさに改めて感嘆の言葉を述べている。20日付けの家族宛のハガキでは、19日にはまた同氏とグローブ公園に散歩に出かけ、「僕の生涯で忘れ得ぬ、すてきな散歩」と述べた⁽²⁸⁾。さらに23日付けのリヴィエール宛書簡ではグローブ公園およびかつてミルトンやクロムウエルが気に入っていた住まいを訪れた際の感動が「もはやこれは賞賛ではなく感動です。小さなあかりがもれている小さな窓や、微妙なニュアンスをおびたレースのカーテンのある心地よい屋敷が建ち並ぶ静かな通りを前にしていつも通り心の喜びを覚えました。しかしそれは涙を催させるような心地よさなのです。これらの家々に人間が住んでいると思うと……」と語られた⁽²⁹⁾。最後の「これらの家々に……」の部分は後年「グラン・モーヌ」にほぼそのままのかたちで用いられた⁽³⁰⁾。

25日付けの家族宛書簡によると、23日の日曜日にサウス・ケンジントン美術

館を訪れている。この美術館は多くの別館を持ち、これ以上大きな美術館はないのではないかと思われるほど広大な美術館で、部屋ごとに古代彫刻、宝石、ガラス細工などが展示され、別館には原始時代の芸術、日本美術などが展示されていた。彼がどのような作品を見たのかは残念ながら特定されていないが、彼は日本の芸術の「洗練と斬新さ」に深い感銘を受けている。30日付けの書簡では同日ナイチンゲール氏、および氏の知り合いの若者と三人でハンプトン・コートを訪ねた。ここはロンドンから15マイルほどの郊外にあるヘンリー八世の宮廷で、美しい庭園に囲まれていた。ここでもアンリは「今までに受けた印象の中で最も深いものの一つです」と、その印象を伝えている。

8月になった。最初の日曜日（6日）にはロスチャイルド家の庭園を訪れた。ここは公園ではなく個人の所有になる庭園なので本来ならば見物は不可能なのであるが、特別の計らいで見学を許可されたのである。ここにはいくつかの温室をはじめとして、日本庭園まであり、目の届く限り花壇で埋め尽くされ、庭園内の所々には浴室まで建てられていた。そして所有者は年間2週間だけここで過ごし、他の期間は庭師や管理人たちだけのものになるのだった。

8月28日付けのイザベル宛の書簡ではこのところ外出熱が冷め、家に閉じ込めて勉強にいそしんでいる模様が語られる。そのかわりにフランスに戻ったら、9月最後の2週間は田舎のいい空気を吸って過ごしたいという希望が語られる。さらにはナンセイにも数日間滞在できたらという希望も語られている。

美術館巡りや公園の散策に比べ音楽会の方はほとんどご無沙汰だった。僅かに「ワグナーの夕べ」といったコンサートの模様が9月8日付けのリヴィエール宛の書簡で報告されている程度である。予定まで含めると三回になるのだが、彼がその全てのコンサートに行ったかどうかは不明である。この書簡からは確かに行ったと断定できるのは一度だけである。

読書と文学活動

英国滞在中の読書は英語で書かれた小説が多く見いだされる。英国から7月9日付けのリヴィエール宛書簡では「アヘン吸引者の告白」（トマス・ド・クウィ

ンシー作)の購入が報告されている。16日付けの家族宛書簡ではディッケンズの「ピクウィク氏」を熱心に読んでいる模様が語られている。23日付けのリヴィエール宛書簡では作品名は挙げられていないものの、英文で読んでも涙をこぼすほど感銘を受けたと述べている。しばらく間をおいた帰国直前の9月13日のリヴィエール宛書簡ではその間にやはりディッケンズの「オリヴァー・ツイスト」、「二都物語」を読了し、12日からはマーク・トウェインの「トム・ソーヤーの冒険」を読んでいるところである旨が語られている。仕事をしながら、美術館や公園を訪れながら、ナイチンゲール氏に毎日フランス語を教えながら、その余暇にこれだけの原書を読めたところから彼の英語力が相当のものであったことがうかがえる。

アンリ自身も自分の英語力にはかなりの自信を持っていたようである。英国滞在も一月半を経過した8月28日の家族書簡ではラカナルでの友人の一人であるヴィジエが英国南部で一月を過ごすために英国にやってきて現在ロンドン滞在中であることを告げ、学校では英語の成績が自分と同等であるその友人との間に聞き取り、会話という語学の実際的な面では大きな差が生じたことを確認した。ヴィジエはアンリと一緒にロンドンを歩いてみて愕然とし、自分もアンリのように英国で働いてみるべきだったとあって悔やんだ。同じことは前日27日付けのリヴィエール宛の書簡でも見いだされる。ここでは家族宛の場合よりもやや得意げにヴィジエは自分が英語で大きな進歩を遂げたことを確認させてくれる「引き立て役」⁽³⁴⁾だったと語っている。9月9日付け家族宛書簡、および9月13日付けリヴィエール宛書簡の双方に記されている。

彼の上達は読解力、ヒアリング、スピーキングばかりでなく、英語を書く能力においても顕著なものがあった。9月9日の家族宛書簡にはナイチンゲール氏が女子社員達に今後は自分の翻訳をお手本にするよう指示した旨がこれもやや得意げに語られている。

フランス語による読書については、この期間中は極めて限られたものであったようだ。ただしリヴィエール宛の書簡ではこれから読んでみたい本として多くの書名が挙げられている。アナトール・フランス、モーパッサン、ヴィリエ・ド・リラダン、ルコント・ド・リールから始まりフランシス・ジャム、アンリ・

ド・レニエ、ラフォルク、ヴェルハーランといったフランス人作家を手始めとして、イブセン、ダヌンチオ、カーライルら外国人作家にいたる極めて多彩な顔ぶれである。

彼自身の創作活動としては今日「ミラクル」に収録されている三編の詩が残された。重要なのは最初に作られた「いくとせの夏を過ぎて」と題された自由詩で、「一人の娘」，「ある家」およびフランシス・ジャムに捧げられている。この詩については7月23日付けのリヴィエール宛書簡にかなり詳しいいきさつが語られている。「僕は彼女（大文字で書かれている。もちろんイヴォンヌ・ド・キエヴルクールをさす）について語りたいことは全て語った。僕は彼女の傍らで考えたことは全て語ったし、それになに一つつけ加えたりはしなかった。」と語り、自信のほどをしめした。彼が恐れたのはこの詩に当時傾倒していたフランシス・ジャムの影がさしてはいないか、ということだった。この詩については山崎庸一郎氏の優れた解釈があるが、いずれにせよこれが英国に来る直前にクール・ラ・レーヌで出会った女性の最初の文学的定着であった。この詩が文学的に優れているかどうかの詮索はともかく、これが今後十年近くをかけて完成される「グラン・モーヌ」の出発点となるべき作品であることは確かである。

忘れ得ぬ人々

英国で彼が接触した人物は当然ながらナイチンゲール氏の家族が中心になる。ナイチンゲール氏にはフランス語の授業を通してだけでなく、ともにリッチモンドやハンプトンコートにも遊んだことはさきに見たとおりである。氏がアンリの英語の能力をきわめて高く評価していたことも同様である。氏は労働者から身をおこして経営者にまで出世した人物で、ホワイトカラーとブルーカラーの融合にも熱心だった。

7月21日（金）にはナイチンゲール氏の娘の通う小学校で花の品評会があった。当時はそれぞれの組織でこのような催しが行われていたのだった。氏の娘も自分が育てた花をここに出品していた。彼はこの会場で好意を抱いている同僚の女子社員に会っておしゃべりをしてしばしば幸福感にひたるが、帰途考え

たのは「セーヌ河と大通りとツーロンだけだ⁽³⁷⁾」とリヴィエールに告白している。言うまでもなくセーヌ河というのはイヴォンヌの後をつけて乗ったセーヌ河のバトー・ムーシュ、大通りというのは当時彼女が滞在していたサン・ジェルマン通り、さらにツーロンは彼女の住まいのある都市をさしている。

7月22日(土)には社員の親睦を深めるための「ガーデン・パーティー」が開催されていた。これは四年前に始められた行事だった。パーティーは昼の部と夜の部とに分かれていた。昼の部は大人の運動会といったもので、芝生の植えられた広場で行われた。女性達はスプーンに卵をのせて落とさないように20メートル走った。途中で計算をしたり、針に糸をとおしたりする競争もあった。これらの競技についてアンリは、女性にこのような優雅ならざる動き方をさせようなどとフランス人だったら決して思いつきはしなかっただろうと感想を述べている。ホワイトカラーとブルーカラーの融合も、アンリの見るところでは決してうまくいってはおらず、水と油のように相容れないように見受けられた。

夜の部は二部構成になり、前半は8時から9時まではのど自慢、後半は9時から11時まででダンス・パーティーといった構成であった。パーティーは11時きっかりに終わった。参加者が安息日になる前に帰宅できるようにという配慮からであった。ヴィクトリア時代のピューリタンの道徳はいまだ健在だったのである。とはいえ男女の交際についてはフランスよりも自由で、「ここではガールフレンドがいるのは当たり前すぎて、誰もそんなことにはもはや関心を持たない⁽³⁸⁾」と驚きを述べているほどである。

このガーデン・パーティーでは彼は総裁政府時代に流行した、首まで垂れ下がるような長いリボンをつけ、縁に刺繍⁽³⁹⁾の飾りのある大きな帽子をかぶった女の子を何人か見かけて深い印象を受けた。彼女達は長い間アンリの頭の中で生命を保ち、やがて「グラン・モーヌ」において木立に隠れているモーヌの前を通り過ぎる三人の少女の中に永久に姿を止めることになった⁽⁴⁰⁾。

ナイチンゲール氏との交際は単なる雇用者と被雇用者、大家と店子という関係を越えて人間的にも響きあうものを持っていた。貧より身をおこして一廉の人物になった氏は極めて現実的、实际的な考えを持ち、ヴィクトリア時代のブルジョア階級の義務とされた慈善による貧民の救済という考えにたいしては極

めて懐疑的だった。それよりも先ず職とそれに見合った賃金をあたえることが肝要で、それさえ実現すれば自ずから問題が解決されるだろうという考えだった。社会的な公正が実現すれば自ずから問題は解決されるし、そうでなければ施しなど焼け石に水に過ぎないと考えていたアンリには受け入れ易い考えだった。事実ヴィクトリア時代には慈善という行為が尊重され、上流階級の義務のように見なされていたが、これらは多くの場合偽善的だったのは否定できない。だがその一方で貧困層の自助を促すような慈善事業もなかったわけではなかった。T. バーナードは1867年に貧民の子供のためのイースト・エンド伝道所を創設し、孤児を収容するためのホーム建設に生涯を捧げた。そして彼のホームから社会に送り出された孤児は六万人の多数にのぼった⁽⁴⁰⁾と言われる。

またメソジストの牧師だった W. ブースは1878年に、軍隊的組織を持った宗教組織「救世軍」を創設し、貧民や犯罪者にたいする慈善事業と宗教的な救済を目指した。ブースの遺志は引き継がれて、今日もわが国を始め各国に「救世軍」が存続していることは広く知られている。

いっぽう、労働者も初等教育の進展とともに自覚を深め、1900年に労働代表委員会が結成され、これは1906年には労働党へと発展した。これは政権党だった自由党へも影響を及ぼし、労働争議法が成立した。この法は従来労働争議が原因の損失は、資本家から要求があった場合には労働側に賠償の責任があったのを、組合に有利になるよう改正したものである。

アンリはナイチンゲール氏にはたいへん好意的だったが、夫人に対しては必ずしもそうではなかった。食い物の恨みによるものであろうか。「もう一つお菓子をいかがですか」と言うその言い方が、いかにも「あなたはほしがってはいけません。十分なはずです。」と言われているような気がする⁽⁴²⁾と7月25日付け家族宛書簡は語っている。

もっともナイチンゲール家でもそのうち彼が腹をすかせていることに気づき、十分パンを与えるようになった。9月2日と9日に分けて書かれた家族宛書簡ではそのことを報告し、先日の悪口の反省をしているのであるから可愛いものである。

この他彼と交際を結んだのはナイチンゲール家に下宿しているマーチン夫人

とその妹の二人の老婦人との束の間の接触があげられる。彼女達はアンリをお茶に招待し、プロテスタントの集会に連れていった。

これらの人々との交際を通じて彼の理解した英国人は、控えめで、礼儀正しく、口数が少なく、服装は地味で、内面的だった。この点において彼の理解も我々の常識とあまり隔たっていないことが納得されよう。

9月になり英国を去る日が近づいた。9日付の家族宛書簡によると16日(土)午後10時ヴィクトリア駅発の列車でロンドンを発ち、17日深夜、あるいは18日早朝両親の待つラ・シャペル・ダンジロン着の予定だった。サン・ラザール駅に到着したオルレアン駅から再び汽車に乗る間に、パリで今回の英国滞在のきっかけを作ってくれたベルナル氏夫妻を訪れて帰国の挨拶を済ませるつもりだった。

それに先立つ2日の家族宛書簡では初めての経験を振り返って、ナイチンゲール家の人々がピアノやフルートを演奏する傍らで読書に耽っていた夕べ、ナイチンゲール氏の細やかな心遣いなどを忘れることはないであろうこと、仕事は単調で面白いものではなかったし、孤独な生活ではあったが、あるいはそれゆえに英国を好きになったこと、英語も好きになり、以前よりも英語をよく知ることになった結果、いろいろな発見もあり、うっとりしてしまうこともあること、などを報告した。そのうえで英国での生活の実質は、悲しい気持ちにおちいることなく過去を振り返ったこと、将来に備えて静かに勉強したこと、大きな楽しみは庭園を散歩すること、美術館を訪れることだったことを告白した。

彼はフランスに戻りしだいナイチンゲール家の赤ん坊のために何か贈り物をして氏とその家族に対する「限りない感謝の念」⁽⁶⁾を表明するつもりだった。またアグレガシオンに応募する前の年にはエコル・ノルマルの金で英国に留学し、その時は再びナイチンゲール家に下宿させてもらうつもりになっていた。

ロンドンでの最後の消息を伝えるのは13日付けのリヴィエール宛書簡である。ここではロンドン発が16日の夜11時になっている。予定が変更になったのか、以前の書簡で言及された時刻が誤りであったのかは不明である。同じこの書簡によれば彼は出発前の僅かな時間をさいて2年前から文通していた英国人女子学生リリアン・ウエーバーに会うつもりだった。この女性について詳細は

不詳であるが7月23日付けのイザベル宛のハガキでナイチンゲール家の長女クレアとリリアン・ウエーバー宛に絵ハガキを出しておいて欲しいという依頼をしている。⁽⁴⁰⁾

こうして彼は英国を後にしたが、再び英国を訪れることもなく、またナイチンゲール家の人々と再会することもなく、エコル・ノルマル入学を果たすこともなく、したがって英語教師になることもなく、最初の英国滞在からおおよそ九年後の1914年9月22日サン・レミの森の戦いで倒れた。同年7月28日に始まった第一次世界大戦での最も初期の戦死だった。あと10日あまりで28歳の誕生日を迎えるはずだった。

〔注〕

作品の引用はすべて Alain-Fournier, *LE GRAND MEAULNES*, Librairie A. G. Nizet, 1983 による。G. M と略記。

家族宛書簡の引用はすべて Alain-Fournier, *Lettres à sa famille*, Fayard, 1986 による。Famille と略記。

Jacques Rivière 宛書簡の引用はすべて Jacques Rivière, Alain-Fournier, *Correspondance*, tome 1, Galimard, 1991 による。A. F-J. R と略記。

(1) Famille, p. 147.

(2) A. F-J. R, p. 60.

(3) Famille, p. 104.

(4) A. F-J. R, p. 64.

(5) Ibid., p. 69.

(6) Famille, pp. 109-110.

(7) A. F-J. R, p. 61.

(8) A. F-J. R, p. 61.

(9) Famille, p. 111.

(10) Ibid., pp. 131-132.

(11) Famille, p. 117.

(12) 村岡健次, 川北稔編著『イギリス近代史』ミネルヴァ書房, p. 210.

(13) 前掲書, p. 211.

(14) A. F-J. R, pp. 60-61.

(15) Ibid, p. 62.

- (16) Famille, p. 110.
- (17) Ibid., p. 114.
- (18) A. F-J. R, p. 63.
- (19) Famille, p. 116.
- (20) A. F-J. R, p. 63.
- (21) Famille, p. 115.
- (22) A. F-J. R, pp. 70-72.
- (23) Ibid., p. 93.
- (24) 海野弘『アール・ヌーボーの世界』中公文庫, p.65.
- (25) 前掲書, p. 66.
- (26) Famille, p. 116.
- (27) Ibid., p. 115.
- (28) Ibid., p. 120.
- (29) A. F-J. R, p. 75
- (30) G. M, p. 243.
- (31) Famille, p. 125.
- (32) Ibid., p. 134.
- (33) A. F-J. R, p. 130.
- (34) Ibid., p. 134.
- (35) Ibid., p. 73.
- (36) 山崎庸一郎『愛のファンタズム アラン＝フルニエ試論』1988年, 踏青社 p. 54-55.
- (37) A. F-J. R, p. 69.
- (38) Famille, pp. 123-124.
- (39) Ibid., p. 124.
- (40) G. M, p. 51.
- (41) 村岡, 川北両氏編著, 前掲書, p. 212.
- (42) Famille, p. 124.
- (43) Ibid., p. 180.
- (44) Ibid., p. 121.